

皆さま

その10をお届けします。

会社時代に飯の種だった EU は未だに目が離せません。なんだか友人のようなものですね。私にとっては。キャメロンの演説は録音して何回か聞いたんですが、流れるようにきれいなんですが、訴えてこないんですよ。

英語漬けの生活の割には、私の英語力は全く上達しません。自信を持って言えます。辞書で同じ単語を何回引くことか。イヤになります。学生に英語の勉強法なども指南しているんですが――。

こう言ってはいけませんが「やっぱりフランス語の方が楽しいねー」とつくづく思います。パリの街かどで聞く早口のパリジェンヌのあの独特の喋りを耳にすると、ほっとします。

3月はちょっと長めで日本に戻ります。

増淵 文規

英国ダラム便り（その10）

[キャメロン首相の危険な勝負]

キャメロン首相は1月23日に「英国と欧州」と題して、国民向けにスピーチを行いました。37分の教科書のような模範的な演説でしたが、残念ながら抽象的で中身が無いと感じました。日本ではどう報道されているでしょうか。中身が無いのはどの国の政治家も似ているかもしれませんが、何というか、訴えてくるものを感じられない。本当にできるかどうかなど関係なく、ミッテランの演説には迫力がありましたね。ウソ言うなと思いながら、あのもっともらしい顔で何回も言われると「そうかな」と思ってしまったものです。役者が違うんですね。演説の中身は、EU に対し英国の立場を明確に主張

し、路線の一部修正を求める。その結果を見て英国が EU に残留すべきかどうかの国民投票を行うというものです。2015年の総選挙で政権党（保守党と自由党の連立）が勝ったうえで、国民投票は2017年に行うというものですから、だいぶ先のことですし、選挙で勝ったらというのもどうなるか全くわかりません。自党保守派からの突き上げと、総選挙対策の苦肉のパフォーマンスにも見えます。ただ世界中どこも同じですが、国民は外交にはほとんど関心が無く、「EU などどうでもいいや」というのが一般国民の反応です。EU 各国の反応も、また英国が勝手なことを言っていると冷たいようです。

キャメロン首相の演説の中で、島国である英国の特殊性に触れています。確かに近距離ととはいえ欧州大陸と陸続きでないことが、英国の大きな特徴になっていると思います。中世のペストの蔓延も宗教改革もナポレオン戦争や両次世界大戦の惨禍も、大陸とは全く違った様相だったわけです。こういう歴史を背負った英国が、欧州大陸と限りなく一つになることはあまり現実的とは思えない。一方フランスなどはフランス人であると同時に EU 人だと思っている人が多いように思えます。自国と EU をほとんど同一視しているようにも見えます。多分原加盟国6カ国の人たちの感情は近いでしょう。自分たちが作った EU ですから。英国は他人が作った EU に対しいつも距離を測りながら接しているように見えます。EC (EU の前身) 設立時に対抗するように EFTA を設立していますし、ドゴールに3回申請を拒絶された後、EC に加盟後も「悪名高い」EU の農業補助にかみついたのは英国でした。通貨ユーロにも加盟していませんし、英国の独自路線は昔から変わりません。

EU に求めている改革の個々の中身には触れませんが、英国（人）が EU あるいは欧州大陸とどうしても肌が合わないのは大きく 2 つあると思います。まず欧州大陸は社会民主的な伝統が強いのに対して、英国は自由経済のチャンピオンを自任している点です。金融・銀行規制強化などは特にシティーを持つ英国には耐えられないところですし、予算も含め EU が大きな政府になっていくのはとても嫌なんだと思います。労働者に大甘な労働規制も英国の DNA には合わない。フランスの週 35 時間労働などが広がるのは許せないのです。次に重要なのは国の自主性・主権の保持です。EU にこれ以上自国の主権の一部を移していく気は英国には無い。それから移民規制や、国境検査なども、日本と似ていて英国は非常に厳格です。島国の特徴でしょう。その気になればいくらでも自由に隣国に出入り可能な大陸とは、考え方が全然違います。ポリス部門の欧州化なども英国は乗っていきにくい分野です。環境規制も同じく、島国としての独自性を主張します。

一方で人の移動はともかく、EU の中で金と物が自由に動き回れることは、英国経済にとってとても重要なことです。貿易の半分以上を EU に依存していますから、関税などかけられてはたまらないわけです。単一市場としての EU から脱退しても良いと考える英国経済人は極めて例外でしょう。キャメロン首相も EU 脱退をまじめに考えているとは思えない。EU への揺さぶりと国民へのポーズだとしたら、危険な賭けですね。個人的には何があっても英国が EU を抜けることはあり得ないと思っています。失うものが余りにも大きいし、英国のいない EU というのは、「—の無いコーヒー」のようなものです。

へたをするとドンドン社会民主的になって肥大化する EU に、自由経済の立場から歯止めをかけられるのは英国です。米国が英国に対し「EUにとどまって欲しい」とけん制する気持ちはよくわかります。発言力のあるバランスとしての英国の役割は非常に大きいと思っています。最近の英国首相には政治力が不足しているのではないのでしょうか。欧州大陸の国から余り相手にされていないように映ります。離脱をちらつかせて EU を脅すようなことはしないで、真っ向から建設的な議論を挑んでほしいと思います。

[偶像破壊]

ダラムから南へ列車で1時間弱。私の好きな古都ヨークです。ヨーク・ミンスターは英国で最大級のゴシック大聖堂です。とにかく大きいのですが、たずまいが何となく寂しい。

フランスのカトリック教会とは装飾の華美性に差があります。最大の理由は正面の入口の壁を埋め尽くしていたはずの聖人像や様々な文様が見当たらないことです。建設は14世紀ですからカトリックの頃です。良く見ると明らかに聖像が取り除かれた跡があります。

英国教会設立時に英国内の教会で多くの偶像が破壊されました。ダラム大聖堂の中にも頭を切り落とされた聖像がいくつかあります。ヨークの場合はヘンリー8世のときの破壊ではなく、17世紀の清教徒革命のときの狼藉らしいです。その後に建て替えられたセントポール大聖堂は、モザイク画その他カトリック教会に負けない華麗な内装ですから、英国教会でのカトリック的

華美戒めの動きは初期だけだったのでしょうか。

2013年2月11日

増渕 文